



Title	それぞれのたたかいが会うところで、ソーシャルワーカーに起きること／できることを考える
Author(s)	菊竹, ももえ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 195-205
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/103644">https://hdl.handle.net/11094/103644</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集3 第17回臨床哲学フォーラム「社会の臨床、そのメチエとエチュード」  
シリーズ第2回：社会の臨床と実践の〈メチエ〉

## それぞれのたたかいが出会うところで、 ソーシャルワーカーに起きること／できることを考える

菊竹 ももえ

所属アレルギーと大人アレルギー

私は菊竹ももえです。和永さんが最初にしゃべったみたいに、断片的な話を最初にします。

私は2011年に阪大に入って、その後、大学院前期課程まで一応つづけて、2017年に卒業というか、仕事を始めたような感じで、8年間、いろいろな仕事をしてるんですね。さきほど資格の話があったのでその話をすると、精神保健福祉士という、一応、国家資格を持っていて、卒業後に通信制の専門学校に入って取ったんですけど、みなさんはご存知ですか？

社会福祉士というのは、英語でいうとソーシャルワーカーで、とくにどんな分野というのとは関係なく、社会のなかで困ってるひとと関わって権利擁護したり、不利益をこうむってる部分に手を差し述べるといって、そういう資格なんですけど、その精神障害のあるひとに特化したバージョンで、なんでそんな資格ができたかという、いろいろな背景があるとおもうんですけど、いちばん大きな理由は、精神病院に入院しっぱなしになってるひとまだまだ日本は多くて、昔、「座敷牢」とかがあったりもして、とにかく地域のなかで生きることが本当に許されなかったような時代もあったんです。当時は「精神分裂病」と呼ばれていた、統合失調症になったりしたら、もうとにかく山奥の病院に入れられて、そのままもう何十年も出てこれないひとがいるということで、それを、世界的にも大きな方針の転換があって、地域で精神障害もちながらも生活できるためのサポートする資格が必要だということで、できた資格です。なんでこの資格をとったのか、私もよくわからないっちゃわからないし、[話せば]長くなるので、身近にそういうひとがいたとか、自分自身、精神的に不安定だったことあるので、興味を持ったりということで、おおざっぱに言うとそういうことなんです。

私が[金]和永さんの話を聴いて、いちばん自分にできなくてすごいとおもったのが、8年間もおなじ場所で働いているということで、私は「所属アレルギー」でして、なんでもとにかくいっしょの場所にいられない、近い人間関係でずっと仲間でいられない、そういう病気があるんですよね。なので、精神保健福祉士として働きだしてから、仕事はそんなまだ長くないのに、もう何回も仕事[場所]が変わってるんです。どんな仕事なのか、というのは後で話します。

もういっこ、つながるか、つながらないかわからないですけど、ずっと学生のころからちょっとずつですね、表現の活動をしていて、歌を作って歌ったりとか、絵を書

いたり、文章を書いたりとか、それを zine [手作りの小冊子] で小さい本にして出したりとか、いろんなことをちょっとずつやってるんです。その話もしたいんですけど、そっちも所属アレルギーがあって…、ぜんぜん仲間がないというか、音楽仲間とかもすごいイヤで、「音楽家」ともおもわないし、自分はなんなんだろう…、「イラストレーター」だともおもっていない。その話もあとでつながってくるんじゃないかなとおもっています。

精神保健福祉士として働いてきた話の前に、学生時代にやっていたことを和永さんもおっしゃってくださって、私もちょっと言いたいなとおもうんですけど、私もですね。あんまり研究をしっかりとやってたわけじゃなくて、ほんまさんが誘ってくれたりして、いろんなどころに出て行って、いっしょに楽しんだりというのをやっていて、長吉高校にも誘ってもらって、いっしょにやりましたし、いちばん熱心に通っていたのは、「たんぼぼの家」といって、障害のあるひとたちが表現やアート活動するための場所なんですけど、そこに行って、いろんなひとがいっしょにダンスをやるワークショップに混ざったりとか、音楽やったりとか、絵を描くところにいさせていただいたりとか、そんなことをしてました。いちばん行ってたのはそこかな。と、当時、いろんな学校でいろんな対話の活動がなされていたので行ったりしてました。

所属アレルギーのほかにもうひとつ、「大人アレルギー」でもあって、いまだに私、大人のひとが怖いと本気でおもってて、なんでかわかんないです。高校生ぐらいまで、ほぼ、引きこもりみたいな感じの生活をして、学校に行ってなかったのが長いせいにしてるんですけど、同年代のともだちと同じノリとかコードを共有して遊ぶということがぜんぜんできなくて、だから大学でも、ぜんぜん、ともだちがなくて。でも、そういう場所に出て行くと、いままで、高校までの生活で会ったことないようなひとたちがいて、長吉 [高校] にそれこそ外国ルーツの生徒がいたりとか、たんぼぼの家にいる障害あるひとたちにも、ほんとにいろんなひとたちがいて、大学とか同世代とか、同じコミュニケーションのコードを共有してるなかで楽しくするというのが、——それこそ私の中二病なんですけど——魅力的に見えなくて、自分とぜんぜん違うひとだけど、なんとか工夫しながらコミュニケーションをとってやるというほうが、楽しくおもえた。いろんなどころに行っていました。そんな感じで、その後もいろいろあって、精神保健福祉士として働くことになったんですけど。

## 2つのエピソード

どんな場所で仕事してきたかという、例えば、精神障害の当事者のひとたちが仕事をするための場所ですね、そこは国の障害制度で保障された場所なんですけど、あと、若者、といってもいま国の定義では39歳までが若者なんで、39歳までのひとでずっと社会との関わりが薄いひとたちの相談支援の場所とか。いちばん長かったのが——今日そこでの話がメインになるとおもうんですけど——国の役所の出先機関とおもってもらったらいいんですけど、「こうこうで困ってるひとたちがいるから、こういう仕事をしてください」って国の委託を受けて仕事をする場所で、[スライドの] 一番下に書

いてある「制度の狭間のひとたちを支援する」という目標を掲げられた相談機関で3年くらい働いていました。「制度の狭間」といっても意味わからないとおもうんですけど、いま制度がどうなってるか、めっちゃ大雑把に言うと、[障害者]手帳があったり年金があったりというのはなんとなく知っているかたもいるとおもうんですけど、それに加えてですね、いまの制度では「障害者」というので全部制度が基本的にいっしょになっていて、身体障害のひとと知的障害のひとと同じサービスの大きな枠組のなかで、どれがそのひとに使えるのか、みたいな仕組みになっています。なので、ヘルパーさんとか、さっき言った仕事をする場所とか、デイケアみたいな日中過ごす場所とかがあって、それぞれ、こういう障害がこんぐらい多かったら、このひとはこれが使えますとか、そういう仕組みになってるわけですね。

制度の狭間として国が想定しているのは、例えば、病気は何も持ってないけど、引きこもりで30年過ごしてるとか、いちばんよく言われるのは、80-50問題といわれるもので、それがメインターゲットになってるらしいんですけど、こどもが引きこもったりとか、知的障害があって、親がずっと介護とか世話をしてきたけど、親が80歳になって、こどもが50歳になって、親が介護できなくなったり、家事ができなくなったり、ゆくゆく亡くなるかもしれないというなかで、その後のことをどうするのか、というのがそういう名前と呼ばれて、想定はされてるんです。けど実際にちょっと働いてみると、ほんとにいろんな相談があって、さっき言ったような話もあるし、ギャンブルでお金がなくなってすってしまったというのあれば、これは後で詳しく話してみたいんですけど、ヘルパーとか福祉制度はどうしても絶対に使いたくない、もちろん病気の状態があれば使えるんですけど、絶対に使いたくないというひとがいたりとか、そんな感じでした。

どんな相談をやったかってとか、どんなことをそのなかで感じたか、話をしないとわかりづらいところもあるんで、エピソードみたいな話したいとおもうんです。多かった相談のひとつが80-50問題と言われるものなんですけど、例えば、あるおばあちゃんが年金はいっぱいあるけど、息子さんが全部ギャンブルでつかっちゃって、息子さんは仕事をしてなくて、それで、でもちょっと息子が怖いから強く言えない。それで、役所から安否確認を頼まれて話を聞きにいったんですけど。ろくに物も食べてなくて困っているはずなのに、いつ行ってもそのひとはそんな話はしなくて、代わりに信仰の話がされるんですね。「人間には、生まれたときから神様に与えられた使命があるんや」って話をずっとするんです。なんで私にそんな話をずっとするのか、最初はわかりませんでした。布教でもされるのかと少し身構えたりもしました。でも、何度も聞いているうちに気づいたことがあって、必ずその話と息子さんの話はセットでされていました。どうやら、そういう息子を産んで育てたことを自分の業であるみたいにおもってらっしゃる。自分が前世でなんかしたからこうなんじゃないか、だとしたら自分はこの息子をなんとか生きさせることが使命なんじゃないかとか、おもってらっしゃるみたいなんです。

こういうとき、ほんとに専門職がどういうことするかというと、これはシンプルに考えると「高齢者への金銭的な虐待」ということになるかとおもいます。明らかに食

べものを食べさせてもらってないし、まだ認知面はしっかりしているけど介護が必要になってもしないんだろうとか。「虐待」というかたちにしようとおもえば十分にできる状況で、虐待だと行政が認定すれば、当人たちがあまり望んでなくても、「もう別々に暮らしてください」、「もう二度と会えません」、とかできるんですけど。それでおばあちゃんには施設に入ってもらいなり一人暮らしの家を見つけて在宅サービスを入れるなりする。そして、息子は息子で、仕事が続かないなどの課題を抱えているので、本人が望んでないので難しいですが、生活保護に繋いでその後の暮らしをどう作っていくか支援していく、ということになるとおもいます。

虐待ということにすべきかどうか、このおばあちゃんに関わってるひとたちで、ずっとしゃべったりしてて。離れ離れに暮らしたら年金も十分あるからちゃんと食べていける、という話を本人にも何度かして、それを本人も十分わかっているんですけど、おばあちゃんはずっとそのひもじい状態にとどまり続けている。それは息子が怒ったら怖いというだけのことじゃないんだ、ということが、ソーシャルワークに一見関係のないような彼女の信仰の話の踏まえるとわかる気がしました。そういうことがあったんで、ちょっと、スピリチュアルな話になって申しわけないんですけど、それぞれのひとがそれぞれの難しい葛藤や使命の中で生きているということを、自分が学んだ感じがして、まずこの話をしました。

それを踏まえて、いろんなひとと関わるとですね、ほんとに、そういうことがたくさんあるんですよ。

2個目は、私が仕事に慣れてきた頃に、自分の仕事を見つめ直さないといけないような出来事がありました。そのひとは、少し他の支援者たちから「クレーマー」扱いされているようなひとで、でもお金がなかったり病状にも緊急性が高かったこともあって、私なりに工夫して関係を維持しながら、医療機関との仲介などを行っていました。しかし、最終的には私にもその「クレーム」の矛先が向きました。「あなたは私のことを理解してくれない。あなたは一见優しいけど結局組織の言いなりでしかない」みたいなことを言われました。そういうのを多くの支援者は「クレーム」として受け流しながら、支援関係を終了させていくのだとおもいますが、私はショックを受けました。なんでかといったら、その通りだったからです。自分のなかでは、組織の中で認められにくい意見も言いながら、相談してくれたひとにできる限り力になりたいとおもって仕事していたんですけど、結局、相談者のために本当に必要だとおもうことであっても、組織の風習で糾弾されそうなことは自然と避けてしまっている自分をおもい出させられました。

そのひとはもともと、病気を抱えながら同居する若い娘の分まで家事全般をしていたんですが、急にその娘が一人で生活したいからといって、出ていってしまいました。

そのひとからすれば、自分だってしんどい中、家事のできない娘のために頑張ってる尽くしてきた感覚もあって、もちろん収入的には完全に娘に依存していたんですが、それを急に見放されてしまった感覚だったんですね。状況から言えば生活保護を受けるしかないんですけど、本人はもう一度娘と交渉して少し生活費をもらうかまた同居したいと考えていました。望みが薄いとはいえ、そういう道を模索するのは悪くないん

ですが、とにかく時間もありません。そこでこちらも焦って保護受給を勧めてしまったことがきっかけで、いわゆる支援関係が壊れてしまったんです。結局はなんやかんや話を聞きながらも「生活保護しかない」というのを私が言い続けたので、ぜんぜん気持ちを理解してくれない、というのはその通りだとおもいますね。理解できていなかったとおもうんです。

後から振り返れば、そのひとの保護を受けたくない気持ちというのはすごく真っ当な気持ちだなとおもいます。おもい起こせば、そのひとに関わっていたひとたちは基本的に「なら勝手にしろ、もう支援はしない」「そんなのはわがままだから付き合ってもらえない」という態度をとるわけですが、私は数ヶ月そのひとの姿を見る中で、このひとにもたたかっているんだな、という感情を抱くことができました。そのひとはやりたいことや自分の自由を諦めて娘の世話をしてきた。賃労働こそしてなくても、そのひとなりに精一杯やるべきことをやって生きてきたんです。そんなひとに、「生活保護を受けることは恥ずかしいことじゃない」というのは、他にも仕事でたくさん言ってきたし、そうおもっているし、そうおもって欲しいなとおもうんですけど、現実的にはやっぱりそうじゃないんですよね。生活保護ってほんとに限られたお金なので、ともだちと金銭感覚が合わなくなってきたり遊びに行けなかったりとか、知人や親戚にも言いたくないからだんだん疎遠になってひとりになっていたりとか、いままでやってたこともどんどんできなくなったりとか、たまに贅沢すると不正受給を疑われたりとか、時々役所のひとが家に来て、実際そこまで細かく見ないんですけど監視のなかで生きてるような気持ちになったりする。やっぱり惨めだと感じざるを得ないような状況がほんとうにあります。そのひとの「なんで私が生活保護を受けないといけないのか」という気持ちは、これまで精一杯生きてきたことへの誇りなんだとおもいます。生活保護を受けろ、と言うことはそのひとにとってその自分の歴史を断てと言うようなことかもしれません。そして、自分でもいままぐ経済的に独立できないこともわかっているからこそ、たくさんの火花を周囲に飛ばしながらその間でもがき苦しんでいたのだとおもいます。そのたたかひの横で私が何ができたんだろうということをいまでも考えます。

### それぞれの“たたかい”

今回、「たたかい」というのをよくわからないけどタイトルに入れたくなったんです。それがですね、そのひとが「生活保護を受けたくない」という気持ちをゆっくり休みながら考えたら、すごくまっとうな気持ちだな、とおもうようになった。そのひとは芸能活動を目指してたんですけども、それを諦めて親とやっていくことにした。それなので友達もはぶりが良かったりして、そんななかで「生活保護を受けることは恥ずかしいことじゃない」と言うのは、業務としてでも絶対にそうだし、私ももちろんそうおもってるし、そうおもって欲しいなとおもっていたりするんですけど、現実的には、やっぱりそうじゃないんですよね。[生活保護を受けると]ほんとに限られたお金なので、ともだちと遊びに行けなかったりとか、ともだちに言いたくないから、疎遠になっ

てひとりになっていたりとか、いままでやってたこともどんどんできなくなったりとか、やっぱり惨めだと感じざるを得ないような状況というのは、ほんとうにあって、毎月じゃないですけど、こんな役所のひとが家に来て、いろいろ品定めするような悪いひとばかりでもないんですけど、贅沢してないかとか、そういうことを見られてる——じっさい、そこまで細かく見ないんですけど——見られているという気持ちになるというか、監視のなかで生きてるような気持ちなったりする。そのなかで、そういう気持ちになりますよね。そのひとに関わってたひとは、私にも攻撃的なメールが来るくらいだから、ほかにも周りに当たりちらしているひとではあったんですけど、そういうのを、「プライドが高いひとだから」とか、「昔の華やかな暮らしを捨てられないのは、そのひとが悪いからだ」と言って、「そのひとの気持ちが変わらないなら、支援できません」みたいなかたち、周りのいろんな支援者たちも自然に、うまく離れていくんです。

でも、そういう気持ちって、誰が聞いていてくれるんだろう？みたいなことがほんとうによくある。おばあさんの気持ちもそうなんですけど、支援者というひとたちには、そういうひとのなかにあるものすごい葛藤の火の粉みたいのが飛び散ってくる状態から、うまく離れていくひともいっぱいいるんですけど。じゃあ、支援っていったいなんなのかな？とかおもったりするわけなんです。

そういうことをわかりやすく整理すると、いまとくに日本の制度は問題解決型になっているんですよ。それはいい面もあるんですけどね。私が勝手にこういう言い方しているんですけど、そのひとが困ってることをアウトソーシングできるかたちにする。一応これは、「障害の社会モデル」に基づいてるとおもうんですけど、本人ができないのは本人のせいじゃない、できないのは家とかの責任じゃなくて、社会の仕組みがそういうふうにならざるを得ないようになってるから、そのひとができるように社会のしくみを合わせるとか、そういう部分もある。だけど、家事ができません、とかいう具体的な「困りごと」——さっき言ったみたいに、身体障害の制度がベースになってたりということもあるとおもうんですけど——「困りごとを解決しよう」と仕組みづくりがなされていて、苦しい気もちとか、ずっと自分の中でも答えが出ない苦しいおもいとかに、アプローチする手段がほんとに制度のなかにはない。カウンセリングには保険がきかないという話も、その一端かもしれないんですけど。ほんとにそうおもいます。

例えば、これがわかりやすいかどうかかわかんないんですけど、——私の主観なので、研究にとってはどうなるかわからないんですけど——女性で結婚して専業主婦で暮らしていた後、DVで逃げてみたいひととかで、診察すれば、必ず精神障害をつけてもらえるという状況なんだけど、でもそのひとたちって家事もできるし、社交とかもそこそこできるので、手帳の等級とか年金とかが低く出るなっておもうんですよ。はじめてそのひとが相談来たときも、すごいわーって泣いて、時々、急に夜中に「いまから夫殺しに行きます」って留守電に入っていたりするようなひとが、一番低い障害の等級が出たりする。等級が高くなれば、そのひとの人生が幸せになるかっていったら、別にそういうことでもないんですけど、すごくそういうことは低く見積もられる感じ

がします。そういうことをいっぱい聴くことだとか、理解して寄り添うことが、それこそが私のソーシャルワーカーの仕事なんだ、とまでおもってるわけではないんです。そこが難しいんですけど。うんでも寂しいな、っておもうんですね。

そういう話を聴いたとき、そのひとのやりきれない、どこにももう、何年も解決しない葛藤みたいなものをみたときに、やっぱりいちばん、私はそのひとのこと知れたな、という気がする。むりやり話引き出したりはしないですけど、そのひとのことを知れたなとおもうし、このひとが本当にずっと抱えてきたこと、そのひとのコアな部分——本当にコアなのかわかりませんが——このひとに出会えたなとおもえる経験のひとつではあるんですね。だからと言って、それをもろに受け止めることがお互いにとっていいことかどうかというのは別のことなんですけど、そういうのを理解というか、一応知っておく、知っているひとがいるというのはいいことなんじゃないかなとおもう。その一方、これを知ってくれてるひとがいる、この苦しみを知ってくれてるひとがいるってことになる、こうしてほしいと期待も高まったりする面もあるとおもう。そういうことを知りながらひととつきあっていくのが、むずかしいよな、どうしたらいいんだろうな、というのが、ここ数年働いてきたなかでの悩みのひとつで、その話をしたかったんですね。

## 私の“たたかい”

いちおう、「私のたたかい」と書いたんですけど、大変やったひとたちの歴史に比べれば、しょうもないと言えそうなんですけど、私も私で、いろいろ生きてきた歴史があって、さっき言ったみたいに、大人が基本的に怖い。怒られたくはない、という単純なこともあるけど、自分が上の年代のひとから受けてきた暴力も多少あって怖いので、ひとに嫌われない振る舞いを無意識にしてしまうとか、それとたたかいたくて、いろいろやってきたけども、なかなか変わらないな、そういう歴史もあったりする。

組織とのたたかいもあります。とくに、私をはじめに言った所属アレルギーと関係あるかもしれないんですけど、噂話がきらいなんです。なぜか、ひとって噂好きですね。福祉の職場って、すごくひとのプライバシーをあつかうので、ゴシップのネタにしようとおもえばできることがめちゃくちゃあるんですよ。このひとはこうらしいよとか。ベント乗ってるらしいよ。そういうことが日々とびかっているんで、このひとはこういう病気なのに、お金がこんだけあってなんだとか、ほんとは働けるんじゃないかとか、そういう当事者のひとたちを評価する発言であふれている。

最初に説明しておきたかったんですけど、大学とかで精神障害のひとの支援に関心をもっているひとは、べてるの家とか、いろんな有名なコミュニティがあって、そういうイメージを多くもってる方もいらっしゃるかもしれないけど、私のいた場所は、めちゃくちゃ普通の場所で、日本のほんとはよくある場所なんです。そういう場所——すべてではないんですが——こういったことがぜんぜんある。私も引きこもりの経験があたりするので、やっぱり、当事者が評価されたり、勝手に語られたりすることにすごい抵抗がある。例えば、私が不登校だったのに阪大に合格したことが、いろん

なひとのいろんな語りに利用されるんですよ。「天才肌やから学校に馴染めんかったんでしょ」とか。そういうことがほんとにずっと嫌で、なので、当事者のことがそういう職場のひとたちのモノサシで見積もられるようなことがされてるとき、もちろん、私もそうしていたことがあったとおもうんですが、ほんとに嫌なんです。それに立ち向かおうにも、そういう発言は当たり前のようにされてるんで、いちいち突っこんでられないし、あまりにもひどいなとおもうときは言うんですけどね。効果があったかまったくわからないんですけど、日々の業務で、こんなひとからこんな相談を受けて、こういうことを答えました、みたいな記録を書かないといけないんですけど、それをですね、私だけ記録の仕方が妙に文学的だったり、そう狙って書いたわけではないんですけど、カウンターとなる表現を使ったりするんです。それでもぜんぜんですね、立ち向かえないぐらいほどそういうもので溢れている。

これは別に福祉に限らないですけど、ほんとに組織というものは、例外をつくるのが一番嫌いなんです。福祉の現場だと、それがもろに出てくる。相談支援では、ほんとに個別の事情があって、そのひとがつながれる社会のいろんなものを探したり、それも福祉サービスだけじゃなくて、本来はいろんな友達づくりでもいいし、卓球クラブに行くんでもいいんですけど、そういう個別のことなんですけど、個別のことをやらないといけないことと、例外をつくりたがらないという最近の組織のあり方が、とにかく相性がわるい。そのなかで例外をつくってもらう努力はするけど、やっぱりその壁が大きかったりする。さっき言ったみたいに、そのひとのたたかってきた歴史を知ったうえで付きあっていく、一緒にいたりするということがなんで難しいのかとか、どうやったらできるのかなというの、いまおもってる疑問です。

### ひとと出会うための表現

その答えになるかどうか、まったくわからないんですけど、最初に言ったように、絵を描く活動もしていて、そこでちょっと面白かったことを喋りたいなとおもいます。

左は、きのうのライブで歌っている写真で、右は2年くらい前の個展の様子です。壁に吊ってる絵はぜんぶ、Googleストリートビューに写っている世界のいろんな地域のひとたちを描いたもので、こちらの写真は、“zine”という小さい、個人が好き勝手に作った本のイベントの様子です。これは私の主催ではないんですけど、ちょっとしたチームになっていっしょにそこで zine をつくってるひとどうしがしゃべれる、そんなことをやっているんですが、私の表現がどうというよりもまず先に、そこで出会うひとたちのことを紹介したいとおもうんです。初めて zine をつくって [たんぼぼの家での『ひるのダンス』] それをイベントに持って行ったのが10年前ぐらいなんです。それまでぜんぜん zine 文化を知らなくて、流れでそうなっちゃったんです。出展者が30組ぐらいいる大きなイベントで、zine のことを知らないひとは、あまりピンとこないとおもうんですけど、内容はまったく定められなくて、形も決まってないし、やることもバラバラなんです。旅行記みたいなものを出してるひとや、政治的な主張をするひともいれば、フェミニズムに関する、ひとのからだの感覚について書いている

ひとが最近が多いし、イラスト集を出してるひともいるし、紙が好きで紙を綴じただけのものを出してるひととかいたり、ほんとにいろいろで、その好き勝手にやっていて、誰にも頼まれてないのにそんなものをこつこつとつくって出してるひとたちが、こんなにいっぱいいるんだ！というのが最初に受けた驚きで、嬉しかったんですね。私もつくるのが基本的に好きなひとなので。そういうところから、私もいろいろつくるようになっていきました。

さっき言ったみたいに、私はそんなに自分のことをミュージシャンだとおもってないし、歌でライブもやってますが、あまりやる気ないって言ったらあれなんですけど、よい音楽をつきつめてつくりたい、というきもちになって、それができたから残しておこう、ぐらいな感じでつくってるんですね。そのなかで、私が面白いなおもったのが、つくること、表現することをきっかけに——もちろん表現そのものも面白いんですけど——ひととの出会い方を考えてるひとたち、実践しているひとたちが結構いて、さっきの zine のイベントを主催している方とかは、もう最初から仲間づくりのためにイベントやってますって言うんです。なんかそのひとも、ずっと社会で孤独をたぶん感じてきたなかで、それぞれ勝手に zine をつくってるひとたちとなら、仲よくなれるんじゃないかとか…大雑把でかなり失礼な紹介してるかもしれないですが。あと、zine と旅をしている、この間イベントで会ったアメリカのひとなんですけど、学校の先生をされていて、こどもたちとっしょに zine をつくったりしてるんですけど、一般的な zine は、結構、手づくり感のある本なので、1000円以下、200円から1000円ぐらいで売ってるものが多いんですけど、そのひとは4000円ぐらいで売ってるんですよ。なんでなんだろうとおもったら、各地で稼いだお金で世界各地の zine イベントに出て、日本にもそのお金で来てみたいなんです。それならその値段も納得いくし、そのひとは、トランスジェンダーのことをテーマに、いろんなひとのことばを紡いでつくっていらっしゃるんですけど、それを世界で、自分が住んでる地域にとらわれずに、いろんな地域に行き、同じようにおもったりしてるひとたちと出会おうとしてるんだな、というのがいいなおもったりとかですね。あと、自分ちにリソグラフという印刷機を買って、原稿を送ってくれたら、うちで印刷しますって言って、印刷したものをまとめて、いろんなひとから送られてきた原稿をまとめて、原稿を送ってくれたひとたちに返しますという遊びをしているひとがいたり。肉体で会うのとも、ネットで出会うのともちがって、知らないひとの書いたものがいきなり届くという、面白い出会いがあったり。

最近おもったことなんですけど、ほんまさんの授業にでてる方にはお馴染みかもしれないんですけど、水俣にフォークシンガーの柏木敏治さんという方がいて、私が歌を歌っているというのがあるもあって、阪大から水俣に行くときに、私も同行させてもらって、お会いすることができたんです。柏木さんは、水俣の土地のことを歌ったり、水俣病の患者さんのことばを詩にして歌ったりと、歌もめちゃくちゃいいんですけど、私たちが行ったらですね、柏木さんが自分で鮎を川で獲って燻製にしてくれたり、竹を取ってきて竹細工にしてくれたり、とにかく、そのひとが自然から受け取ったものをそのひとなりに加工して、ほかのひとにプレゼントするということをやってるひとなんだ、

と私には見えて、歌もそのひとつなんだなって、すごいおもえたんですよ。それを見たから、ひとにプレゼントできるというのがすごいなとおもって、身近な話で言うと、2年前にばあちゃんが亡くなったときに何か棺に入れるものがないかなと、ばあちゃんがずっと窓から見てた景色の絵を描いて入れて燃やしたとか、私のやっているのは、そんな感じなんです。

そういう自分と仕事をする自分とのギャップが常にあって…表現とは何かというのは、やってるひとにとってそれぞれだとおもうんですけど、やっぱり私の場合は、しゃべったり会話したりすることより、裸に近い考えというか、自分の一番素直な気持ちとかあり方をそこに出したいなとおもっているの、それを受け取ったひとがどうおもってくれるのかな、と考えるのが楽しいことのひとつだとおもっているのです。なので仕事でソーシャルワーカーとしてひとに関わるときに、さっき話したように専門家としてやらないといけないとかがあるとか。組織の範囲内でやらないといけないとか、このひとと出会って、こんなことを感じたのに、それは言えないとか、そのひとのために歌を作りたいとおもうんだけど、作れないとか——誰かにプレゼントするのは職場では割と嫌われる傾向にあるんで——とにかく素直な気持ちで動けないということのもどかしさというのが常にある。自分にとって表現の場所があるだけに、そのギャップをすごいいつも感じやすく困ってます。

とは言いつつも、仕事で出会ったひとのことばを歌にしたこともあったりして、ひとと関わりのなかで表現をつくりだすことは、面白いなとおもいつつ、仕事としてやっている限りは仕事のなかではできないよね。

[ほんま] 作った歌を歌ってもらっていいですか？

そうですね。説明がないとあまり意味がわからないかもしれませんが、部落解放運動に加わっていたおばあちゃんから私が聞いた話をそのまま歌詞にした歌を歌います。内容は聴いてもらったらわかるとおもいます。

私に戒名は要らない

解放のひとたち むかし 戒名三文字やった  
でも 誰も読めんから それをありがたがった

解放のひとたち むかし 戒名三文字やった  
でも 誰も読めんから それをありがたがった

ある女のひとの与えられた戒名は  
無学女  
その三文字  
みんな読めんから それをありがたがった

仏様やなんやいうても  
権力に媚びへつらって  
力のない人には こんなもんか

命は平等やない  
私に戒名は要らない  
私に戒名は要らない

命は平等やない  
私に戒名は要らない  
私に戒名は要らない

タイトルを「ソーシャルワーカーにできることを考える」としたの、そのきっかけのひとつになるかなとおもったことがあります。zine づくりの活動してるひとたちが、よくですね、集めた zine をライブラリとしていろんな場所で公開する、というのをやっていて、自分でも集めた zine を他の場所にもって行って見てもらうことをしているんですね。私はなかなかひとりのひとに関わりつづけるのが難しかったりするんですが、仕事のことでよかったなとおもえることもあって、くわしく内容は言えないんですけど、あるひとがすごく悩んでたことを、最近新しい仕事で別の場所に行ったときに、そのひとよりもだんぜん若い高校生が同じことで苦しんでいるのがわかった瞬間があって、なんか自分自身がある意味で、そういうひとたちが苦しんで生きてきた歴史のライブラリになっている感じがしたんですね。それをどう使ったらいいのかな？とおもうんですけど、歌をつくるのも、そういった実験のひとつかなとおもいます。

(きくたけ・ももえ)

[ほんま] ありがとうございます。